はなす、聞く、そして、見る、触れる伝承シンポジウム/声・歌・ことばのカ

藤純

はじめに

クス、 笑話、 であり、総じて体感されるものという側面を指摘したい。 の、さらに、説話の舞台に身を置くなど、体で「触れる」もの 容を瞥見し、説話は「はなす」「聞く」だけでなく、「見る」も 伝承、観光、イベント、メディア、世間、噂、定型、関係性、 まキーワードをあげても、歴史、信仰、災害伝承、英雄・偉人 間話・現代伝説を扱う。その論点は多岐にわたり、思いつくま 説と観光」を執筆していた。この巻はジャンルとして伝説・世 い。ここでは、拙稿で論じた桃太郎話の伝説化と古い伝説の変 なす』を踏まえ、展望を述べることだった。筆者は同巻に これらのジャンル、論点すべてにふれることはとてもできな シンポジウムでの筆者の役割は『ことばの世界 江戸文学、色話、怪談、動物、 車、海外旅行、政治家、偏見、異文化理解等々と様々だ。 現代、 都市、飲食、 第3巻 ・セッ 伝 は

子を紹介する。これにより説話の伝承の諸相を通覧したい。でいる、筆者が関心を持つ「法螺抜け」伝承、すなわち法螺貝ついで、筆者が関心を持つ「法螺抜け」伝承、すなわち法螺貝ついで、筆者が関心を持つ「法螺抜け」伝承、すなわち法螺貝

一、猿橋の桃太郎から

「伝説と観光」で、筆者は山梨県大月市猿橋の裾太郎伝説を下またま甲州街道に犬目・鳥沢・猿橋の宿が並んでいた。 大・雉・猿に出会い、付近の岩殿山の鬼を退治したという伝説 大・雉・猿に出会い、付近の岩殿山の鬼を退治したという伝説 大・雉・猿に出会い、付近の岩殿山の鬼を退治したという伝説 大のような伝説成立の過程を跡づけた。

た。餅はそれなりに宣伝され、猿橋付近と桃太郎の関係づけは、大またま甲州街道に犬目・鳥沢・猿橋の宿が並んでいた。この連続について、桃太郎話を知る者が鬼退治の道中に見立て、の連続について、桃太郎話を知る者が鬼退治の道中に見立て、の連続について、桃太郎話を知る者が鬼退治の道中に見立て、の連続について、桃太郎話を知る者が鬼退治の道中に見立て、の連続について、桃太郎話を知る者が鬼退治の道中に見立て、の連続について、桃太郎話を知る者が鬼退治の道中に見立て、の連続について、桃太郎話を知る者が鬼退治の宿が並んでいた。これまたま甲州街道に犬目・鳥沢・猿橋の宿が並んでいた。これまたま甲州街道に犬目・鳥沢・猿橋の宿が並んでいた。これまたま甲州街道に犬目・鳥沢・猿橋の宿が並んでいた。これまたま甲州街道に犬目・鳥沢・猿橋の宿が並んでいた。これまたま甲州街道に犬目・鳥沢・猿橋の宿が並んでいた。これなりにはいている

になったのである。

はなったのである。

はなったのである。

はなったのである。

になったのである。

はなったのである。

はなったのである。

になったのである。

が時代に適応して「生き残っていく」姿でもある。だが、同じ事態を、鬼伝説など、在来の伝承から見れば、伝説これは、昔話の桃太郎が特定の土地に結びつく過程である。

によって説話を適応させ「生き残らせる」のである。あるいは意志や本能があるかのような表現だ。たしかに、こうした比喩的な概念により、説話を主体にすえて歴史や文化をとらえる、口承文芸研究独自のまなざしが可能になった。これは高くる、口承文芸研究独自のまなざしが可能になった。これは高くところで、伝説が「生き残る」というのは、あたかも説話にところで、伝説が「生き残る」というのは、あたかも説話に

きことである。すなわち、説話は一面で「見たくなるもの」で、桃太郎話の伝説化や在来の伝説の適応が進んだのは、注目すべを浮かび上がらせてくれるのである。猿橋で観光を契機としてを浮かび上がらせてくれるのである。猿橋で観光を契機としてといい。

「生かし残す」といった方が明確かもしれない。

史伝承の性格が強まっている。

の場所を提供した。すなわち観光に利用できたのである。でもある。そうであればこそ、それを望む人々に、地域が説話可能ならばその場所に立って立体的に「体験したくなるもの」

一、法螺抜け伝承の展開

(一) 今切の法螺抜け伝承

に記載した。「中比」という曖昧な過去に年代が与えられ、歴切の事例だろう。今切は中世の災害で海岸が切れ、浜名湖が切の事例だろう。今切は中世の災害で海岸が切れ、浜名湖が切の事例だろう。今切は中世の災害で海岸が切れ、浜名湖が切の事例だろう。今切は中世の災害で海岸が切れ、浜名湖が切の事例だろう。今切は中世の災害で海岸が切れ、浜名湖が切の事例だろう。今切は中世の災害で海岸が切れ、浜名湖が切の事例だろう。今切は中世の災害で海岸が切れ、浜名湖が切の事例だろう。今切は中世の災害で海岸が切れ、浜名湖が切の事例だろう。今切は中世の災害で海岸が切れ、浜名湖が切の事例だろう。今切は中世の災害で海岸が与えられ、歴に記載した。「中比」という曖昧な過去に年代が与えられ、歴に記載した。「中比」という曖昧な過去に年代が与えられ、歴に記載した。「中比」という曖昧な過去に年代が与えられ、歴に記載した。「中比」という曖昧な過去に年代が与えられ、歴に記載した。「中比」という曖昧な過去に毎月が切りにいる。

所になり、享和二年(一八〇二)の『東海道中膝栗毛』もこれ本伝説は旅人の関心をひき、遺跡の今切は見物すべき街道の名の『東海道名所図会』など、名所記・名所図会でも紹介された。(一六五八~六一)の『東海道名所記』、寛政九年(一七九七)(一方、承応二年(一六五三)の山鹿素行『海道日記』など多一方、承応二年(一六五三)の山鹿素行『海道日記』など多

に言及する。

いも受けるようになる。 (5) 本草書に記載され、伝説が学門上の標本や考証の事例という扱本草書に記載され、伝説が学門上の標本や考証の事例という扱 本草書に記載され、伝説が学門上の標本や考証の事例といる

(二) 歴史伝承・小名所

承で、その遺跡も残っていたわけである。
「今に其跡あり」と記す。地誌の記載より約九○年前の歴史伝薦野村(福岡県古賀市)の裏山が崩れて三つの法螺貝が現れ、「今に其跡あり」と記す。
し時」、
、表す十九年五月大雨ふりし時」、
、法螺抜けは今切以外にも例がある。元禄十六年(一七○三)

三)噂・世間話

ていた。これは安倍川の奥山から「法螺ノ貝」が出て「山津浪」見ると、静岡市賤機では「子年ノ荒」という大洪水が記憶され元~二年(一九一二~一三)成立と推定される『賤機村誌』を法螺抜けは現実味のある噂や世間話としても話される。大正

法螺抜けによる将来の危険を人々は予想している。尚一ツノ法螺ノ貝アリー後世大洪水ノ惨害ルベシト云ヘリ」と、になったものという。さらに「安倍奥山ノ字大ま、ト云フ所ニ

(四)瓦版あるいは現代伝説

い、そこに立ちたい、という人々の存在をよく示す図である。 は螺抜けは瓦版の題材にもなった。明治四年(一八七一)七法螺貝の穴」の前に見物人が描かれている。説話の現場を見た 原の『江戸と東京 風俗野史』に掲載されているが、見ると、藤の『江戸と東京 風俗野史』に掲載されているが、見ると、藤の『江戸と東京 風俗野史』に掲載されているが、見ると、
「法螺貝の穴」の前に見物人が描かれている。説話の現場を見た
い、そこに立ちたい、という人々の存在をよく示す図である。

三、説話体験への欲求

に際立つ現象といえる。ただし、昔話のように「むかしむかし」ん、これは伝説や世間話といった、現実世界とつながった説話ん、これは伝説や世間話といった、現実世界とつながった説話れて見物人が集まる現象である。つまり、具体的な土地に即はた説話の展開が、人々の関心を集めているのである。もちろした説話の展開が、人々の関心を集めているのは、説話が評判に以上、法螺抜け伝承を通し、説話の伝え方、受け取り方の諸以上、法螺抜け伝承を通し、説話の伝え方、受け取り方の諸

かる。「あるところ」の説話でも、これに通底するような現象が見つ

たとえば、筆者が調査中の桃太郎伝説がそうだ。また、猿橋の伝説の成立と先後関係は不明だが、これに伴うかのように、大月市に近い都留市などで、身近な土地を舞台にした桃太郎話が記録されている。猿橋と桃太郎の取り合わせが人々の連想をが記録されている。猿橋と桃太郎の取り合わせが人々の連想を紹介した猿橋の桃太郎の狂歌が、そもそも現実の土地に見立てた昔話の要約ということもできる。

昔話を各自の身近な世界で展開させたいという、人々の欲求の 「呪宝聴耳」「幸運な男子」などの昔話が具体的な土地に関わっ 「呪宝聴耳」「幸運な男子」などの昔話が具体的な土地に関わっ 「死宝聴耳」「幸運な男子」などの昔話が具体的な土地に関わっ 「記の 「記の 「記の 「記の 」と呼んでいる(伊藤 は、これまでも知られていた。『ことばの世界 第1巻 つた は、これまでも知られていた。『ことばの世界 第1巻 つた は、これまでも知られていた。『ことばの世界 第1巻 つた

「昔ばなしを自分が生まれ育った土地の風景や食べものや習慣場所について具体的なイメージがあるという。すなわち、人はところの」の話ではあるが、語り手・聞き手の心には、時代・また、小澤俊夫氏によると、昔話は「むかしむかし」「ある

の具体化が、言葉として外に現れると、特定の土地に即して語い、学かべるとき、ごく自然な状態ならば、自分のなれしたし思い浮かべるとき、ごく自然な状態ならば、自分のなれしたし思い浮かべるとき、ごく自然な状態ならば、自分のなれしたしにしたがって造形」しており、「ある話を頭の中で場面としてにしたがって造形」しており、「ある話を頭の中で場面として

なわっているのではないか。たれっているのではないか。程度の差はあれ、説話にそた、そうした欲求を喚起する力が、程度の差はあれ、説話にそちたいという人々の願望は、無視しえないと筆者は考える。ま説話を話し、聞くだけでなく、その舞台を見たい、そこに立

られた昔話になるのではないか。

注

現れと位置づけることもできる

- (2) 説話の「創造」に注目すると、い(1) 詳しくは(齊藤 二〇〇七)参照。
- 二〇〇五)参照。 こうした観点は(国文学解釈と鑑賞(2) 説話の「創造」に注目すると、いっそう人間の活動が

(3) 今切の成立時期には昔から諸説があるが、永正七年八月(3) 今切の成立時期には昔から諸説があるが、永正七年八月とするものに軍記『足利季世記』がある。本書

茅原元常『東藩日記』等。なかには『丙辰紀行』と内容・三浦迂斉『東海済勝記』、安永〜天明末(一七七二〜一七八九)百井塘雨『笈埃随筆』、文化十二年(一七七二〜一七八九)百井塘雨』、関原益軒『吾妻路之記』、宝暦十年

本文・出典等を掲載したので参照されたい。

文章が類似するものも。また、典拠不明だが貝原益軒な

(5) 宝永六年(一七〇九)貝原益軒『大和本草』、正徳二年(一八三一)武井周作『魚鑑』、天保十年(一八三九)年(一八二二)寺島良安『和漢三才図会』。また、今切以外年(一八〇三~〇六)小野蘭山『本草綱目啓蒙』、天保二年(一八〇三~〇六)小野蘭山『本草綱目啓蒙』、天保二年(一八二二)武井周作『魚鑑』、天保十年(一八三九)山本世半『百品考』等。

と古記に記されている。穴中に地蔵尊を祭る。」なお、宝され、この貝を吹き進軍すれば、勝利を得ることができたの地帯まで海であったためか、この穴よりホラ貝が掘り出(6) ただし、立札の説明は以下の通り。「ホラ貝の穴 往古此

(7) 詳しくは(齊藤 二○○三)参照。瓦版や伊藤晴雨のス石塔が「本堂の螺貝穴ノ辺ニ有リシ由」という記述がある。暦二年(一七五二)「三河国額田郡真福寺年序」に、ある

参考文献

料』一九八六 新居町 第四巻 考古・古代中世資新居町史編さん委員会『新居町史 第四巻 考古・古代中世資

界 第1巻 つたえる』二〇〇七 三弥井書店

伊藤清司「越境する口承文芸」日本口承文芸学会『ことば

の世

国文学解釈と鑑賞「特集 創られる伝説」『国文学 解釈と鑑小澤俊夫『昔ばなしとは何か』一九八三 大和書房

話研究』一三 二〇〇三 ――「道灌山の法螺抜け―瓦版の怪異譚とその背景―」『世間

一七 二〇〇七 一 | 「猿橋の桃太郎―見立てから伝説へ―」『世間話研究』

(さいとう・じゅん/天理大学文学部)会『説話・伝承の脱領域』二〇〇八 岩田書院―「紀伊加太の法螺抜け―災害伝承と異界―」説話・伝承学

148